

# 太郎良信先生のご退職に当たって

会沢 信彦

太郎良信先生は、1991（平成3）年4月、本学教育学部教職課程に助教授として着任され、31年の長きにわたり、教育学部および本学のために多大な貢献をされました。本稿では、太郎良先生の業績、功績、思い出について、私見を交えて述べさせていただきます。

第1に、研究者としての先生についてです。

先生のご専門は、生活綴方を中心とする日本近代教育史です。『生活綴方教育史の研究—課題と方法一』（教育史料出版会、1990年）、『「山芋」の真実—寒川道夫の教育実践を再検討する一』（教育史料出版会、1996年）の2冊の単著をはじめ、数多くの編著や分担執筆、論文、研究報告書を執筆されておられます。その業績は教育学界の内外で高く評価され、新聞で取り上げられたこともありました。先生の研究意欲が衰えることはなく、最近も毎年複数の論文を発表されておられます。

第2に、教育者としての先生についてです。

先生は、教職課程、心理教育課程、発達教育課程において、「教育原理」「教職概論」「教育思想史」などの講義科目のほかに、心理教育課程ではゼミ（専門演習、卒業研究）を担当されました。太郎良ゼミには、絵本を研究テーマとする学生が多く集まりました。心理教育課程の4年次は、教育・保育実習や採用試験に追われ、9月頃までは何となく落ち着かない雰囲気です。したがって、卒業研究は“効率重視”の“短期決戦”で仕上げようとする学生が多い中、国立国会図書館に足を運んで地道な調査を重ね、私から見てもしっかりとした論文を仕上げる学生もおりました。これも先生のご指導の賜に違いないと大変感銘を受けたことを覚えています。

ところで、先生は講義系科目では学生から厳しくて怖い先生という印象を持たれていたようですが、どうもゼミ生に対しては違っていたようです。相好を崩してゼミ生と談笑する姿をよくお見かけしました。その結果、卒業生から結婚式や飲み会に招かれる機会もあったと伺っています。また、会議などでの先生のご発言から、学生に対する愛情を感じることもしばしばでした。学生の前では厳しいことを指摘しながらも、心の中では何よりも学生を大切にしていたのが先生であったように思います。

第3に、学内での先生の役割についてです。この点については2つの側面について述べることにします。

1つめに、何と言っても2003年4月の心理教育課程創設以来、10年にわたって課程長として心理教育課程を牽引されてきたことです。心理教育課程の創設は、女子短期大学部の改組とも関わる、大学にとっての一大事業であったはずですが、この難事業を乗り越えて心理教育課程がスタートし、小学校教員、幼稚園教員、保育士養成において大きな成果を挙げることができたのは、ひとえに太郎良先生のリーダーシップがあったからに違いありません。

ところで筆者は、密かに先生を「Mr.心理教育課程」と呼んでいます。筆者のように1年遅れで2004年4月に採用された者を含む、心理教育課程の創設メンバー12名（特に、当時の若手）にとっては、先生は「心理教育課程の父」とでも言うべき存在でした。とにかく、「太郎良先生とともに心理教育課程を走ってきた」という印象です。特に、着任時より学部教務委員を仰せつかった筆者は、右も左も分からない中で、事あるごとに先生にご相談していました。現在、当時の先生のお立場を受け継ぐ役割となり、先生からのご助言・ご指導がどれほど役に立っているかしれません。

2つめに、2013年4月からの2年間、教育学部長として学部の発展に尽力されたことです。学部長と

しての先生の功績は数多くあるものの、筆者は、英語専修をお作りになったことがその最大のものだと考えています。本学では、これまで、文学部と国際学部において英語教員養成が行われていましたが、そこに教育学部も加わることになったのです。本学は、我が国の英語教員養成において中核的な役割を果たす大学の1つであると言って間違いありません。英語専修設置に関しては、教授会の場で議論が混乱したという記憶がありません。その背景には、水面下でのさまざまなご苦労があったことと思いますが、何よりも、学部長としての先生の、将来を見越した熱い思いが英語専修を作り上げたと言って過言ではないように思います。

さて、「事あるごとに先生に相談する」のは、現在でも変わりません。先生はいつも迅速かつ的確な助言をしてくださいます。先生は過去の文献を中心に教育を探究する教育史学者であると認識していますが、実は、常にデータを基に物事を考えるサイエンティストの側面もお持ちです。会議や学生への講話の折には入試や学生の成績などのデータを出され、数字に弱い筆者が舌を巻くことがしばしばありました。筆者は、先生が長きにわたりリーダーとして心理教育課程の発展を支えた背景にあるのは、教育史学者としての卓越した洞察力と、サイエンティストとしての緻密な分析力に違いないと確信しています。

筆者がかつての先生の役割を担うこととなった現在、気軽に相談できる先生がおられないのは、大いに不安を感じるどころです。しかし、これからは、「太郎良先生ならきっとこのように判断されるだろう」と考え、業務を遂行していきたいと思います。

ご退職後は、教育史学者としてのお力を遺憾なく発揮され、さらなる研究活動に邁進されることと拝察いたします。先生のご指導に改めて感謝申し上げるとともに、これからも発達教育課程、教育学部、そして文教大学を見守り続けていただきたく、お願いする次第です。

(あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部発達教育課程・心理教育課程長)